



朝顔の〈時の方舟〉に乗って

金沢大学附属図書館長 柴田正良

われわれ金沢大学附属図書館がアーティストの日比野克彦氏の明後日朝顔プロジェクトの理念に賛同し、中央図書館で苗植式を行ったのが2009年の6月初めであった。この朝顔プロジェクトの理念は当時おそらく、図書館職員の間でさまざまに解釈されたに違いない。私はといえば、「種は、時を越える事のできる乗り物である」という表現に、学生のメタファーとしての「朝顔の種」を見出して、爽やかな想像の広がりを楽しませて頂いたという辺りである。種はここで育てられ、遠くの異世界に持ち込まれ、そこで一所懸命に花を咲かせ、異邦人の記憶を込めた種をまた生成する。心は種に乗り、種は〈時の方舟〉に乗る。そのようにして時間を運ばれていく種は、大学が苗床となって育てている学生たちであり、その大学の知の苗床となっているのは図書館である。

おおよそ、そんな勝手なイメージを頭に描きながら暑い夏を迎えたとき、少し当惑する事態が起こった。当初、われわれは、中央図書館の四面すべてに蔓を這わせ、もって緑のカーテンで図書館全体を覆うつもりであった。しかし、朝顔はカーテンとはならず、何本ものテープになってしまったのである。原因は何か？やれ苗植の時期のせいだとか、プランターの大きさのせいだとか、天候不順のせいだとか、いろいろと話は出たが真相は分からない。私が気に入

っている説明は、夏前の一時期、水切れを起こし、命の危機を感じた朝顔がもはや蔓や葉を延ばすのを止めて、せっせと次の種をこしらえることに精を出したから、というものである。われわれは、図書館から垂れ下がった無数の緑のテープに、次世代へと命をつなごうとする花の確かな意志を感じ取るべきなのかもしれない。収穫祭は、11月の終わりに70名を超す参加者を得て行われた。

朝顔は「ジャパニーズ・モーニング・グローリー」という英語名の、しかし中国が原産の植物である。朝顔は清楚な青の花という一般的なイメージを持つが、九州大学の仁田坂英二先生によると、実は、朝顔のゲノムの中を飛び回るトランスポゾンという「動く遺伝子」の活動が極めて活発なので、花の色や葉の形や蔓のよじれなどに突然変異の生じた「変化朝顔」を創りやすいのだそうである。おかげで江戸時代後期には、文化・文政期と嘉永・安政期の二度にわたって、この変わり朝顔が愛好家の間に爆発的なブームを引き起こした。「乱獅子」、「比翼孔雀」、「雪月台」といった、おおよそふつうの朝顔からは想像もつかない名前は、江戸庶民が朝顔に見立てた〈美〉のメタファーであったに違いない。しかし、これらの突然変異体は、命の愚直な継承という種本来の役割からすれば、悲しき逸脱なのだろうか。

そうではない、と思う。〈時の方舟〉から今もこぼれ落ちる朝顔がかいま見せてくれるのは、作り手と種との〈美〉の無言のやり取りである。それもまた、種がもつ命の豊穡さの一つであろう。種は気ままに散開し、大地の襞に深く入り込み、ときには思わぬ冒険もする。ところで、日比野氏によれば、「美とは価値観が変容する力のこと」である。なるほど、そうであったか。では、知識や思考とは何なのだろう？プラトンのアイデアの世界なら美と真と善は究極のところ一致したであろうが、現実世界ではそうはいかない。〈美〉に誘われた者が〈真〉を捉えそこね、〈善〉を踏み外すことはよくある話だ。つ

まりこの世界では、知識や思考は、知の革命を静かに準備し、人々が変革の擾乱に踊っているときに〈美〉の幻惑に耐え、革命の後にその実りをしたたかに収穫する術である。派手ではないかもしれない。靈感とも無縁かもしれない。しかし、大学と大学図書館が提供する知識や思考は、種たちが〈時の方舟〉に乗って旅をするためのもう一つの、そして不可欠の〈糧〉なのである。

なお、われわれ金沢大学附属図書館は今年もまた、この朝顔プロジェクトを継続するつもりである。



朝顔のツルで作った巨大リース！

- 中央上： 挨拶をする柴田図書館長
左下： 参加者に図書館スタッフお手製のお汁粉をサービス！

＜平成21年11月27日 収穫祭＞